

新渡戸稻造博士をめぐる二冊の書籍

土屋 博

文語日誌（平成二十八年三月二十八日）

一、佐藤全宏著「新渡戸稻造と歩んだ道」（教文館、平成二十八年一月刊）

著者の佐藤教授（夜學高校の教師を経て、大阪市立大學名譽教授）は、「新渡戸稻造全集」（教文館刊）の責任編輯者にして、我が國新渡戸研究の第一人者なれば、新渡戸博士に關する著作は十三冊目となる。本書は平成二十三年より二十七年までの氏の講演録及び執筆せる文章を纏めたるものなり。

佐藤教授曰く、「新渡戸は七年ごとに仕事を變へたり」と。

成程かく考ふれば、新渡戸博士の廣範多岐に亙る生涯をば、要領よく鳥瞰することを得べし。

三十歳までは勉強。（札幌農學校（クラーク博士去りし直後の二期生）、東京大學（帝國

大學以前）、米國ジョンズホプキンス大學、獨逸のボン大學、ハレ大學留學）

その後七年間は母校の札幌農學校教授

その後七年間は臺灣總督府（砂糖振興）（最後には京都大學教授も兼ね）

その後七年間は第一高等學校校長

その後七年間は東京大學法科大學教授（植民政策）

その後七年間は國際聯盟事務次長。（當初ロンドン、其の後ジュネーヴ）

その後七年間は貴族院議員、太平洋問題調査會、毎日新聞顧問など。（昭和八年加奈陀

のバンフにて國際會議に出席したる後、ヴィクトリア市にて客死す）

本書にては、次の如きエピソードの紹介あるも微笑まし。作家吉屋信子は、栃木縣立女學校一年の砌、新渡戸博士の講演にて、「これからの時代は良妻賢母のみにては不十分なれば、女性も社會の中にて自立すべし」と聽く。壇上より「さうは思はぬか」と博士より直かに尋ねられたる信子は、思はず「はい」と答へたる由。新渡戸の一講演、其の後の女史の人生を大きく變へたるは、教育者としての博士の本領躍如たるの感あり。

二、「新渡戸稻造の世界 第二十四號」（新渡戸基金刊）

岩手縣に在る財團新渡戸基金は、毎年秋に「新渡戸稻造の世界」なる同人誌的書籍を發行す。小生も過去に寄稿したることありし處、昨年九月には第二十四號刊行せらる。五千圓札より新渡戸稻造の肖像消えて久しき折柄、なほ新渡戸博士の遺風を慕ふ人々の多きを見るは感慨深し。新渡戸の生き方、思想の脈々と後世代に引き繼がれつつあるを嘉ぶ。

同書には、英文學者市河三喜氏の一高生時代に見たる校長新渡戸稻造の姿、活寫せられ、興味盡きず。曰く、『我々は一高時代に新渡戸博士の課外講義を聞き、會心の章句を朗讀せられたる名調子に接し、朗讀の如何に文章を作るに必要な要素かを切實に知らされたり。自分の書きたる文章を朗讀してみ、なだらかならず、少しにても引掛かる處あらば、其處は書き直さねばならぬと悟りたり。』と。

（平成二十八年四月十四日受附）